

「山茶華図」修理報告

鶴田大¹ 當間巧²

はじめに

本作品は一般財団法人沖縄美ら島財団所蔵「山茶華図」である。令和5年8月1日から令和6年3月31日まで石川堂で修理を行った。今回の修理では本紙の横折れ、糊浮きの修理後、表装裂地を新調して掛幅装に再装丁した。修理にあたり担当職員を鶴田大とし、修理担当者を當間巧が担った。

I. 名称

山茶華図

II. 作品の形状及び寸法

1. 本紙

- ①基底材 絹
- ②寸法 修理前 丈 160.0 cm 幅 50.1 cm
修理後 丈 160.2 cm 幅 50.6 cm
- ③本紙枚数 1枚
- ④本紙の特徴 繰ぎの無い1枚の平織絹
- ⑤画材 顔料・墨・膠

2. 装丁

修理前

- ①装丁 掛幅装
- ②表具寸法 丈 220.3 cm 幅 67.1 cm
- ③表装形式 明朝表具
- ④裏打ち紙 3層
 - 肌裏紙・楮紙
 - 増裏紙・楮紙
 - 総裏紙・楮紙
- ⑤表装裂 上下柱・濃茶地龍唐草文緞子
明朝、筋・金茶地斜子
- ⑥軸首 象牙頭切軸
- ⑦収納箱 外箱・杉差込箱
内箱・桐印籠箱

¹ 一般財団法人 沖縄美ら島財団 総合研究所 琉球文化財研究室 研究員

² 文化財修理・表具師 石川堂

修理後

- ①装丁 掛幅装
- ②表具寸法 丈 220.3 c m 幅 67.5 c m
- ③表装形式 明朝表具
- ④裏打ち紙 4 層
 - 肌裏紙・楮紙（新調）
 - 増裏紙・美栖紙（新調）
 - 中裏紙・美栖紙（新調）
 - 総裏紙・宇陀紙（新調）
- ⑤表装裂 上下柱・濃茶地龍唐草文緞子（新調）
 - 明朝・金茶地斜子（新調）
- ⑥軸首 紫檀頭切軸（新調）
- ⑦収納箱 桐太巻添軸桐印籠箱（新調）

III. 修理前の損傷状況

1. 本紙には多数の横折れと皺、折山の亀裂が生じていた。



図 1 修理前 表具全図



図 2 修理後 表具全図



図3 修理前 本紙下部 強い折れが確認できる。

2. 裏打ち紙には糊浮きが生じ、表具と料絹に暴れが生じていた。

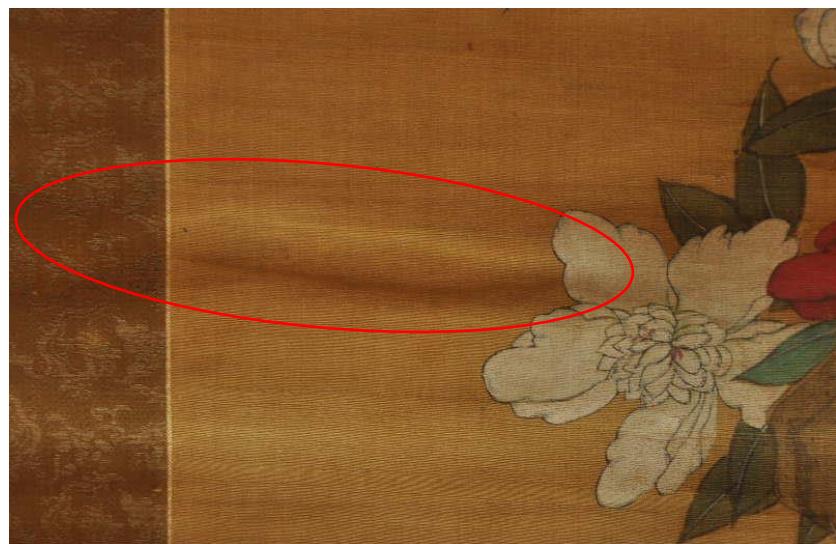


図4 修理前 本紙中央左部 表具と絵絹の暴れが確認できる。

3. 本紙絵具層の欠失が見られた。



図5 修理前 本紙中央

右部 花の部分に施された絵具に欠失が見られた。

4. 本紙料綢の亀裂・欠失箇所に補修綢が施されていた。

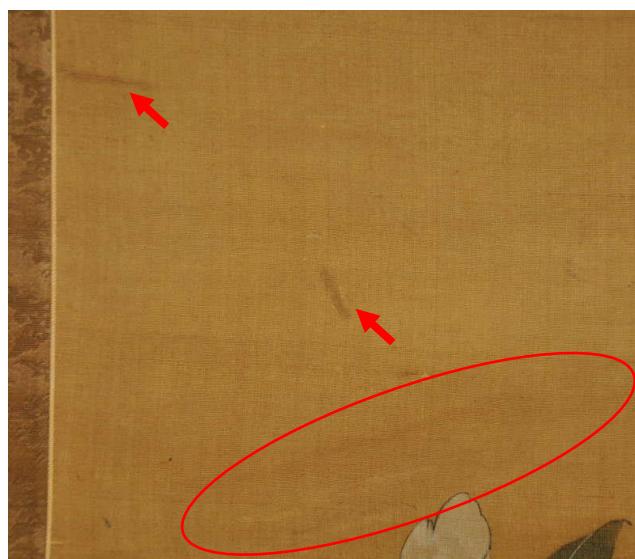


図6 修理前 本紙中央左部 亀裂部分の補修綢



図7 修理前 本紙中央左部 大きく補修された補修絹が確認できる。

5. 本紙肌裏紙には補彩が施されていた。



図8 修理前 本紙右下部 濃い黒色調の補彩が確認できる。

6. 被災時の熱の影響で軸木と中央部の鉛が膨張した影響で表装裂地と本紙に破損が生じていた。



図 9 修理前 表具下部 表具を巻いた状態で膨張した鉛が、表具と本紙を押し当て破損が生じていた



図 10 右：修理前 鉛の膨張と表装裂地の破損が確認できる

IV. 修理方針及び概要

1. 実施の作業及び方針の決定・変更等は、一般財団法人沖縄美ら島財団の本件担当者と協議・監督の下進める。



図 11 修理中 協議風景

2. 絵具の剥落止めを施す。

薄膠溶液を用い、絵具層の割れ・浮きなどの箇所の剥落止めを行い絵具層の接着・強化を図った。剥落止めによる過度な膠投与は、絵具層又は料綱の硬化を招く結果となる為、必要最低限に止めた。

3. 本紙のクリーニング作業を行う。

本紙全体を加湿し、水分に汚れ等が溶け出した後、本紙表裏に吸水紙を置き、吸水紙に染み・汚れを移し除去した。

4. 本紙料綱の欠失箇所に補修綱を施す。

補修綱は本紙に類似の「電子線劣化綱」を選定し、天然染料（矢車）で染色、水酸化カルシウム溶液で媒染後用いた。

5. 本紙の折れが生じている箇所、及び今後明らかに生ずると思われる箇所に、伝統的な修理方法である折れ伏せを入れた。

6. 表装裂地、鎧、八双、軸木、掛け紐等を新調する。

7. 桐太巻添軸桐印籠箱、白絹帛袱紗を新調する。

収納保存にあたっては太巻添軸に添えて巻き、折れ破損の要因を軽減した。

V. 修理工程

1. 修理前に写真撮影を行い、本紙の状態を調査した。
2. 裏打ち紙を除去し表具装を解体した。



図 12 修理中 解体業後写真

3. 薄膠溶液を用い絵具の剥落止めを行なった。

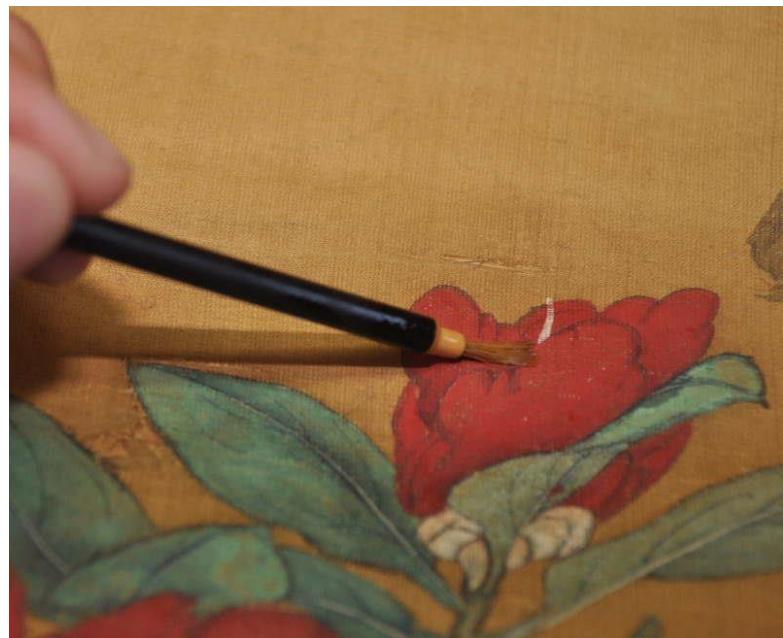


図 13 修理中 剥落止め作業

4. 本紙汚れの除去を試みた、作業は本紙を傷ない範囲にとどめた。

5. 布海苔水溶液を用い本紙表面に表打ちを三層貼り付け乾燥させ、「乾式法」を用い必要最小限の水分で旧裏打ち紙を捲り除去した。



図 14 修理中 裏打ち紙除去作業

6. 本紙料綢裏面に施されていた旧補修綢を除去した。



図 15 修理中 旧補修絹の除去作業

7. 欠失箇所に補綴を施した。補綴は本紙に類似の電子線劣化綿を選定し、天然染（矢車）で染色、水酸化カルシウム溶液で媒染後用いた。



図 16 修理中 本紙料綿の欠失箇所



図 17 修理中 補綴作業

8. 小麦粉澱粉糊（新糊）を用い、美濃紙（楮紙）で本紙の肌裏を打った。肌裏紙は天然染料（矢車）で染色、水酸化カルシウム溶液で媒染後用いた。



図 19 修理中 本紙の肌裏打ち

9. 新調した表装裂に、新糊を用い美濃紙で肌裏を打った。



図 20 修理中 表装裂の肌裏打ち

10. 本紙、表装裂に美栖紙を使用し増裏を打った。糊は古糊を使用した。裏打ち後、仮張りを施した。



図 21 修理中 本紙の増裏打ち



図 22 修理中 表装裂の増裏打ち

11. 本紙の横折れが生じている箇所、今後明らかに生ずると思われる箇所に折れ伏せを施した。折れ伏せ紙は美濃紙用い、糊は新糊を使用した。

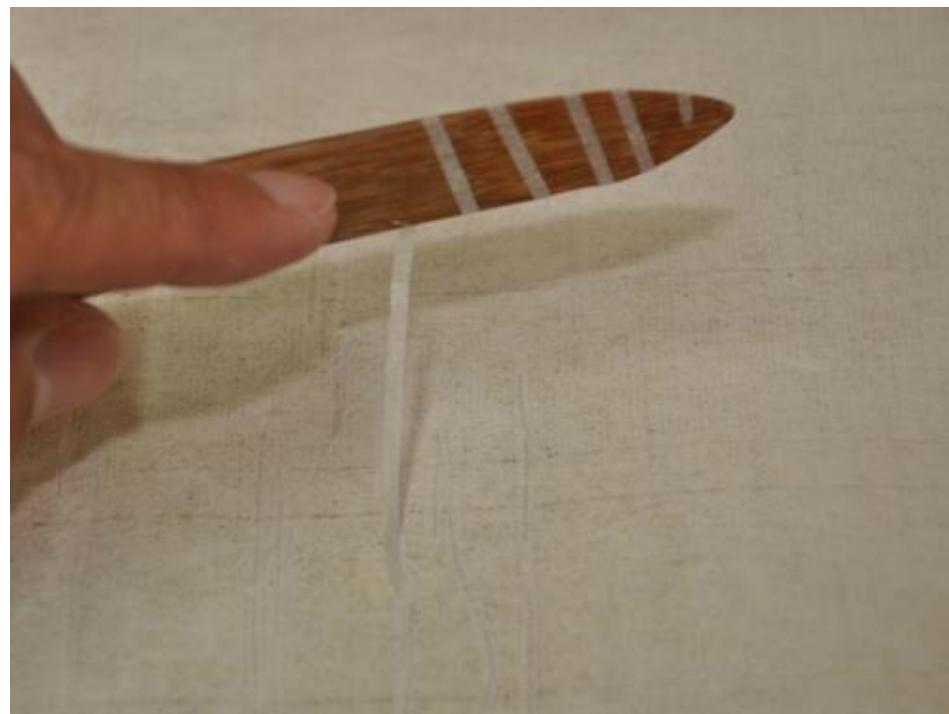


図 23 修理中 折れ伏せ入れ作業

12. 本紙と表装裂を「明朝表具」に付け廻した。



図 24 修理中 付け廻し



図 25 修理中 付け廻し作業後

13. 古糊を用い美栖紙で中裏を打った。裏打ち後、仮張りを施した。



図 26 修理中 中裏打ち

14. 古糊を用い宇陀紙で総裏を打った。裏打ち後、仮張りを施した。



図 27 修理中 総裏打ち作業

15. 鎔、軸首、八双、軸木、掛け紐等を新調した。

16. 必要な箇所に補彩を施した。

17. 十分に乾燥させた後、表具に仕上げた。



図 28 修理中 仕上げ作業

18. 桐太巻添軸桐印籠箱を新調し、紙帙を製作後、表具を白絹帛袱紗に包み印籠箱に収納した。



図 29 桐太巻添軸桐印籠箱

19. 修理後の写真撮影・報告書を作成した。

VI. 修理前後の状態

1. 表装裂

修理前は上下柱に濃茶地龍唐草文緞子、明朝・筋に金茶地斜子を配した明朝表具に仕立てられていた。修理後の表装裂地は一般財団法人沖縄美ら島財団の本件担当者と協議し、上下柱に濃茶地龍唐草文緞子、明朝・筋に金茶地斜子を選定し修理前と同じ明朝表具に配した。



図 30 修理後 表具全図



図 31 修理前 表具上部



図 32 修理後 表具上部

2. 軸首

修理後の軸首は、一般財団法人沖縄美ら島財団の本件担当者と協議した結果「紫檀頭切軸」を使用した。



図 33 修理後 紫檀頭切軸

2. 本紙の折れ・折山の亀裂

斜光線を照射して、修理前後の状態を比較する。



図 34 修理前 横折れが多数確認できる　図 35 修理後 折れが收まり平滑な本紙面



図 36 修理前 本紙右下部 折山の亀裂が生じていた

図 37 修理後 本紙右下部

4. 表具と本紙の暴れ



図 38 修理前 本紙中央左部 斜光線写真
表具と絵絹に暴れが生じていた。



図 39 修理後 本紙中央左部 斜光線写真
裏打ち紙を打ち直し、仮張りを施す事で
暴れが解消した。

5. 絵具・彩色層



図 40 修理前 本紙中央右部 絵具に欠失が見られた



図 41 修理後 本紙中央右部

絵具の欠失が進行しないように剥落止めを
46 行った。

6. 本紙料綱の亀裂・欠失箇所

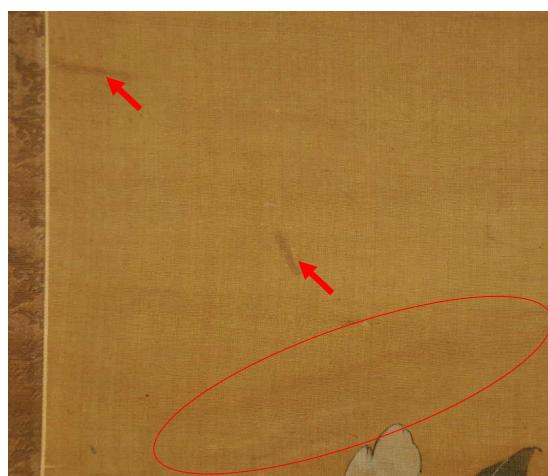


図 42 修理前 本紙中央左部
大きく補修された補修綱



図 43 修理後 本紙中央右部
欠失箇所に補修綿を施した



図 44 修理前本紙中央左部 亀裂部分の補修綱



図 45 修理後本紙中央右部
亀裂・欠失箇所に補修綿を施した

7. 本紙の補彩箇所



図 46 修理前 本紙右下部
裏打ち紙に濃い黒色調の補彩、本紙料絹にも
黒色の補彩が付着していた



図 47 修理後 本紙右下部
繕い補修した絹補絹の部分のみ補彩を

8. 被災時・熱の影響で破損が生じていた表装裂地



図 48 修理前 表具下部

表具を巻いた状態で膨張した鉛が、表具と本紙を押し当て破損が生じ、表具裂地には熱による影響か劣化が生じていた。担当者と協議した結果、元の表具裂地と軸木は被災資料として別保存し、新たに表装裂を新調し再装丁した。



図 49 修理後 表具下部

VII. 作品の技術分析

顕微鏡撮影

本紙（表面） 撮影は修理後、本紙の安定した状態で実施した。

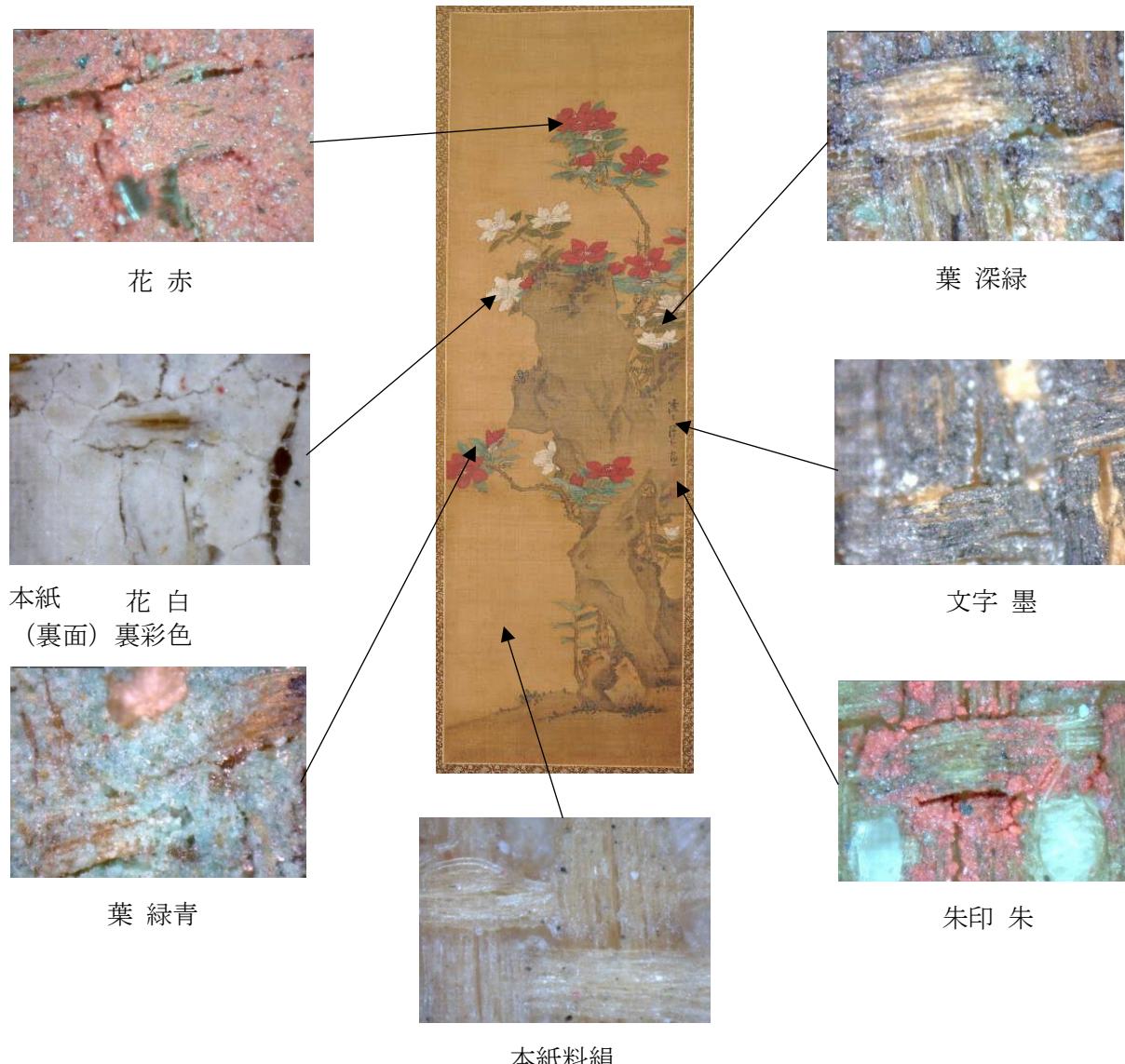


図 50 顕微鏡撮影

本紙（裏面）裏彩色



図 51 顕微鏡撮影写真位置図



図 51- ①白花 白



図 51- ②白花 白



図 51- ③白蕾 白



図 51- ④赤花 白



図 51- ⑤赤花 白



図 51- ⑥赤花 白



図 51- ⑦葉 緑青



図 51- ⑧葉 緑青

裏彩色

本紙裏面、旧裏打ち紙除去作業後、裏面絵具の調査を行った結果、上記の箇所に裏彩色の痕跡が確認できた。主に裏彩色は白花・白蕾、赤花の裏面に白色の絵具、葉の裏面には緑色の絵具が用いられていた。しかし過去の解体修理で行われた肌裏紙の除去作業時に、失われた裏彩色（絵具）部分も見られた。中国絵画で伝統的表現技法として裏彩色が用いられている事が分かった。

VIII. 修復諸資材

1. 接着剤

①新糊（中村糊店・京都府京都市下京区）

原材料は小麦粉澱粉。水によく沈殿させ煮出した後、糊化したものを使用する。

肌裏打ち・折れ伏せ入れ等各所に使用。



図 52

②古糊

原材料は小麦粉澱粉。新糊を瓶に入れ5年程鍾乳洞にて保存したものを使用した。新糊に比べ接着力は劣るが、柔軟性を与え保つ事が出来る。「打ち刷毛」という特殊な表具用刷毛を使用し裏打ちを行う。

増裏打ち・中裏打ち・総裏打ちに使用。



図 53

③布海苔（八木熊・福井県）

原材料は紅藻類のフノリ科の海草。水に煮出した溶液を使用する。適度な粘度・接着力を有する。

本紙表打ちに使用。



図 54

④膠（一般社団法人天野山文化遺産研究所・神奈川県）

原材料は黒毛和牛雌乾燥皮・ホルスタイン牛乾燥皮。

水で煮出した後ゼラチン質を固めたもの。

可逆性に優れ高い接着力を有する。

日本画・絵具、墨の固着材。

絵具の剥落止めに使用。



図 55

2. 染料

天然染料 矢車（中村長商店・京都府京都市中京区）

原材料はカバノキ科ハンノ木属夜叉五倍子の果実。果実を水で煮出した後の染料溶液を使用する。補修絹・本紙肌裏紙の染色に使用。



図 56

3. 紙

①美濃紙 長谷川紙（長谷川和紙工房・山形県鶴岡市）

原材料はクワ科の楮。中でも国内産那須楮白皮を使用した手漉き和紙。薄く強靭で長期の保存に耐える。本紙、表装裂の肌裏紙・折れ伏せ紙に使用。

②美栖紙 白雪（昆布尊男製・奈良県吉野郡吉野町）奈良県指定伝統工芸品

原材料クワ科の楮。紙漉きの際、古粉（炭酸カルシウム）を添加する表具用手漉き和紙。薄く柔軟性があり、古糊と合わせて使用する。増裏紙中裏紙に使用。

③宇陀紙 福虎（福西弘行製・奈良県吉野郡吉野町）奈良県指定伝統工芸品

原材料クワ科の楮。国内産楮を使用し、地元特産の「白土」を混入し伝統的製法で漉かれた表具用手漉き和紙、強靭で長期の保存に耐える。美栖紙に比べやや厚いが、風合い・質感共に軟らかさがある。古糊と合わせて使用する。

総裏紙、上巻き絹の裏打ち紙に使用。

IX. 作業期間

自・令和 5 年 8 月 1 日

至・令和 6 年 3 月 31 日

X. 作業場所

沖縄県うるま市石川 2738-11-2F

石川堂 當間巧

XI. 修理写真



図 57 修理前 本紙全図



図 58 修理後 本紙全図



図 59 修理前 表具全図



図 60 修理後 表具全図



図 61 修理前 表具全図 斜光線写真



図 62 修理後 表具全図 斜光線写真



図 63 赤外線写真

図 64 紫外線蛍光写真



図 65 修理前 外箱・杉差込箱 内箱・桐印籠箱



図 66 修理前 作品を巻いて収めた様子



図 67 修理後 桐太巻添桐印籠箱



図 68 修理後 桐太巻添軸芯に作品を巻いて収めた様子



図 69 修理後 新調した柿渋引き紙帙